

今回のお客様

公民館前で志田クリーニング店を経営する

しだ よしこ
志田 芳子さん 71歳 3丁目

“薪(まき)や炭の時代から、石油コンロ、プロパンと、
時代の変化を商売を通して見てきました！”



公民館前の(有)志田商店といえば、いつぞやご紹介した八百屋の佐藤富治商店と並んで買い物客でごった返していた燃料と雑貨のお店です。芳子さんは昭和42年、現在の新潟県柏崎市からお嫁に来ました。「西千葉駅は当時、平屋の木造で、ひなびた駅にびっくりしましたが、歩いてここまでやってくると、佐藤八百屋さんのにぎやかなこと、それに売っている野菜の安いことにまたびっくりしました。一束、小松菜が5円、ほうれん草が10円、お米も10キロが600円くらいだったと思います」。いやいや志田さんもお忙しかったじゃないですか、とうかがうと、「当時の志田商店は炭やプロパンガスといった家庭燃料、それに、園芸用品から簡単な組み立て家具まで何でもある雑貨屋でしたが、とくにプロパンガスの仕事が忙しかったですね。当時は、お正月に箸(はし)や茶碗、汁椀といった食器類を新調したものでしたから、とりわけ年の瀬は忙しい毎日でした」。

(有)志田商店は、現在の京成千葉中央駅前のツインビルが建っているあたりで、お菓子と燃料を商っていたのを、昭和26年に現在地に越して来たものです。「昭和28年に石油コンロが入ってきて、それまでの薪や炭の時代から石油やプロパンという時代に移り変わっていく中で、オイルショックまでは忙しく商売をしていました」。そうした多忙な中で、お母さんと協力しながら、芳子さんは3人の子どもを育て上げました。「もともと私は、忙しいのは苦にならないたちでしたから。子どもは娘ばかり3人で、それが孫の代になると男の子ばかり3人で」と笑います。昭和48年には、いまのビルになりました。



お店から溢れた日用雑貨品 当時

まもなく60歳を迎えようという芳子さんに、一大転機が訪れます。ご主人の精一さんが倒れたのです。「両親は90近い高齢だし、正直、これから先どうしたらいいんだろうと思いました」。一冬、芳子さんは一人でがんばりましたが、雑貨とクリーニングを残してお店を縮小します。「『なんでも一人でやらせなさい、それがリハビリになるんだから』とお医者さんにも言われて、クリーニングの仕事は主人のリハビリにいいと思って続けたんです」。それから15年、幸いご主人は、お店を一人で切り盛りするまでに回復しました。

松波や町会についてお聞きしてみました。「災害はないし、この町はいい町だと思います。町会も、敬老会やみなさんの作品展を開くなどよくやっていると思います。ただ、回覧板の回り方はもう少し早くならないかなと思います。行事やお葬式が終わってからその通知が届くようなことが、何度かありました。それからお年寄りの多い町ですから、声を掛けていただければ私もお手伝いしたいと思っています」。

志田商店には、りっぱな卓球台が鎮座しています。「リハビリセンターで、卓球をやるといいと言われて、主人が倒れてすぐ買ったものです」。いまは無料開放していて、時折、子どもたち、女性たちの歓声が上がったりしています。「私はボケ防止にラジオ体操をしたり、『数読』と言う数字の穴埋めパズルを解いたり、花植えを楽しんでいます」。